

「考えの形成」についての一考察

－ 新美南吉の日記を活用して －

石田通大・河野晋也

(奈良市立左京小学校) (奈良教育大学附属小学校)

A Consideration "Formation of Idea" in "Reading" Literav Works: Utilizing Nankichi's diary

Michihiro ISHIDA, Shinya KOUNO

(Sakyou Elementary School, Nara) (Elementary School attached to Nara University of Education)

要旨：本研究は、国語科において2020年度から導入される新学習指導要領の示す、「C読むこと」に着目する。「読むこと」の領域での、「考えの形成」については、「文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えを形成することを示し、(中略)自分の既有的知識や様々な体験と結び付けて感想をもったり、考えをまとめたりしていくこと」とされている。このことから、作品を読む際、自分の既有的知識や様々な体験が児童の根底にあり、それらと児童の読みとを結び付けることが「考えの形成」において必要であるということがわかる。その手立てとして、新美南吉作品を読む学習活動と共に作者の背景に迫ることができる南吉の書いた「日記」を活用する。それらを合わせて読む学習活動を展開することで、児童にとって「考えの形成」の向上に繋がるのかについて明らかにする。

キーワード：新美南吉 Niimi Nankichi
日記 diary
国語科教育 Japanese language education
ごんぎつね Gone fox

1. はじめに

平成29年3月に告示された小学校学習指導要領解説・国語編(以下:新学習指導要領とする)では、「学習内容の改善・充実として、【知識及び技能】と【思考力、判断力、表現力等】の各指導事項について、育成を目指す資質・能力が明確になるように改善をした」と示され、以下の5つについて明記された。①語彙指導の改善・充実、②情報の扱いに関する指導の改善・充実、③学習過程の明確化、「考えの形成」の重視、④我が国の言語文化に関する指導の改善・充実、⑤漢字指導の改善・充実である。^①中でも③の中の、「考えの形成」については、中央教育審議会答申において、「ただ活動するだけの学習にならないよう、活動を通してどのような資質、能力を育成するのかを示すため、(中略)全ての領域において、自分の考えを形成する学習過程を重視し「考えの形成」に関する指導事項を位置付けた。」^②とされている。よって、資質、能力を育むためには授業改善を行い「考えの形成」を育むことが重要である。

2. 目的

本研究では、「C読むこと」に着目する。新学習指導要領において、「読むこと」の領域での、「考えの形成」につ

いて、「文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えを形成することを示し、文章の構造と内容を捉え、精査・解釈することを通して理解したことに基づいて、自分の既有的知識や様々な体験と結び付けて感想をもったり、考えをまとめたりしていくこと」^③とされている。このことから、作品を読む際、自分の既有的知識や様々な体験が児童の根底にあり、それらと児童の読みとを結び付けることが「考えの形成」において必要であるということがわかる。そして、各学年において、文学的な文章の「考えの形成」に関わる目標を新学習指導要領から抽出すると以下の表のようになる。(表-1)

	第1学年及び第2学年	第3学年及び第4学年	第5学年及び第6学年
考えの形成	オ 文章の内容と自分の体験とを結び付けて、感想をもつこと。	オ 文章を読んで理解したことに基づいて、感想や考えをもつこと。	オ 文章を読んで理解したことに基づいて自分の考えをまとめること。

表-1からは、いずれの学年においても、体験と結び付けたり、理解したことに基づいたりといったように「考え

の形成」には、自分自身の知識や体験が重要であることがわかる。そこで、本研究では、「考えの形成」を育むため、既知の知識や様々な体験を結び付けることが必要であり、そのための手立てを明らかにすることを目的とする。その手立てとして、南吉作品を読む学習活動と共に、作者の背景に迫ることができる南吉の書いた「日記」を活用する。それらを合わせて読む学習活動を展開することで、児童にとって「考えの形成」の向上に繋がるのかについて明らかにする。

3. 研究方法

研究については、次の4点の方法で行う。

- ① 「読むこと」についての先行研究で課題を見出す。
- ② 「ごんぎつね」が掲載されている教科書の「てびき」を分析する。
 - ・ 分析結果
- ③ 既知の知識や様々な体験を結び付ける手立てとして南吉の背景にせまる。
 - ・ 新美南吉の生涯について
 - ・ 南吉の作品の教材価値について
 - ・ 南吉と日記について
 - ・ 南吉の日記とESDとの関わりについて
- ④ 南吉作品と日記を用いて行った実践について、児童の実態及び変容を検討する。
 - ・ 実践の概要
 - ・ 実践の実際
 - ・ 児童の変容

3. 1. 「読むこと」についての先行研究

物語を読む際、白石(2013)は「読解力を身につけていくには、「土台」が必要であるとし、「方法」を示して授業を行うことが、児童生徒の論理的な思考を伴った読みの力につながる⁽⁴⁾と述べている。また、河野(2016)は、「人物の性格や心情等は、「行動描写」「会話描写」「情景描写」から読むことができるという方法を示すことでどの叙述に着目すればよいのかの視点を与える。そうすることで、叙述を基に読む「方法」を身につけることができると考える。」⁽⁵⁾と述べている。これらのことは、筆者も文学的な作品を読む学習の際、大切にしたい学習活動であると考え、到達目標を提示した上で実践を行っている。また、小山(1998)は「国語科の物語の学習で重要なのは、一人一人の児童が自分なりの読みをもつことである。そのための方法として相互対話的対話を通して他者の読みと対話することによって、自分の読みを見直し、新たな読みを見出していくことが考えられる」⁽⁶⁾とし、互いに交流を行うことの大切さ、効果を示している。

筆者は白石、河野、小山の示す、学習過程には納得できる。しかし、白石、河野、小山の考えでは、学習の方法が示されているだけに過ぎず、既知の知識や体験と結び付け

る方策は示されていない。これが、今回の課題である。更なる、「考えの形成」を児童の身に付けるためには、これらの学習過程に、新学習指導要領が示す、既知の知識や体験と結び付ける手立てが必要である。そのための手立てとして、著者の「日記」を活用することを提案する。作者の「言葉」を児童の基礎知識とすることで、より深い「読み」が生まれ、「考えの形成」に役立つのではないだろうか。

3. 2. 「ごんぎつね」が掲載されている教科書の「てびき」を分析する。

「ごんぎつね」が掲載されている教科書の「てびき」を分析するについてである。これを行う理由は2点ある。1点目は、教科書を活用する意義について、2点目は、南吉作品と教科書との関わりについてである。

まず、1点目の、教科書を活用する意義についてである。教科書は、学校教育法第三十四条に「小学校においては、文部科学大臣の検定を経た教科用図書又は文部科学省が著者の名義を有する教科書図書を使用しなければならない」⁽⁷⁾と示され、その活用に関して、法的根拠が明確にされている。また、現行の教科書の学習内容をみると、説明的文章や文学的文章等といった本文の掲載の続きに「てびき」がある。この「てびき」には、単元で児童に付けたい力が明確に示されている。教科書に記載されていることから、児童も見たり、読んだりすることができ、児童自ら、学びの到達目標がわかる。このことから教科書を活用した学習は、どの学校でも展開されていることが推測される。

2点目の南吉作品と教科書との関わりについてである。南吉作品は、昭和28年に初めて「おじいさんのランプ」が中学1年生の教科書に掲載されるのを契機に、昭和29年には「手ぶくろを買いに」が小学3年生の教科書に掲載され、昭和31年には「ごんぎつね」が小学生4年生の教科書に掲載された。「ごんぎつね」を最初に取りあげたのは大日本図書で1956年(昭和31)のことである。以後東京書籍、光村図書と順に掲載し、1977年(昭和52)には、光村図書、教育出版、日本書籍、東京書籍の4社が取りあげている。また、1989年(平成元)からはすべての教科書で「ごんぎつね」を取りあげている。「ごんぎつね」以外にも「てぶくろを買いに」(三省堂3年)「あめ玉」(光村図書5年)が掲載されている。過去には、「赤いろうそく」(教育出版2年)、「きよ年の木」(教育出版)「おじいさんのランプ」(大日本図書・東京書籍6年)などの南吉作品も教科書に掲載されている。⁽⁸⁾このように、南吉作品は、様々な教科書に掲載がなされており、特に「ごんぎつね」に関してはすべての教科書に30年に渡り掲載され、様々な実践が行われているであろう。

以上2点の理由から、「ごんぎつね」が掲載されている教科書の「てびき」の分析は本研究を行うに有効な研究方法であると考えられる。その内容を整理すると、以下のような内容となった。(図-2)

3. 2. 1. 分析結果

	目標	言語活動	活動例
東京書籍	・人物の気持ちの変化と、中心となる人物とほかの人物との関わりを考えながら読む。	・兵十に対するごんの気持ちを考えながら読み、最後の場面のごんと兵十について感想を <u>伝え合おう。</u>	・兵十に対するごんの気持ちを考えよう。 ・ <u>読んだ感想を伝え合おう。</u> ⁽⁹⁾
光村図書		・読んで考えたことを <u>話し合おう。</u>	・登場人物の行動や気持ちの変化を読もう。 ・物語をめぐって <u>話し合おう。</u> ①くわしく読んで分かったことや判じたこと、考えたことを発表しましょう。そして、感じ方が分かれたことの中から、グループで <u>話し合いたいテーマを決めましょう。</u> ②選んだテーマについて、 <u>話し合ひましょう。</u> ・書いてみよう。 ・この本、 <u>読もう。</u> (手ぶくろを買いに、でんでんむしのかなしみ、木の祭り、がらまうのたんじょうび) ⁽¹⁰⁾
三省堂	・気持ちの変化を考えながら読もう	・気持ちの変化を考えながら読もう	・感想を <u>伝え合おう。</u> ・登場人物についてくわしく読み取る。 ・登場人物の気持ちの変化をまとめる。 ・くわしく読んで考えたことを発表する ⁽¹¹⁾
学校図書	・人物の気持ちを物語の表現から想像して読みましょう。	・人物の気持ちを物語の表現から想像して読みましょう。	・兵十に対するごんの気持ちは①どこで変わりましたか。②どんなふうになりましたか。 ・ごんと兵十のそれぞれの気持ちを考えましょう。 ・物語がどのようにかかっているかに注目して <u>話し合ひましょう。</u> ⁽¹²⁾
教育出版	・自分の考えた副題をつけよう	・自分の考えた副題をつけよう	・場面ごとに、ごんの行動や気持ちを読んでいきましょう。 ・「1」の場面を読んで、ごんのせいかくを <u>話し合ひましょう。</u> ・この物語がどのようなお話なのかを表す副題を考えて、発表しましょう。 ⁽¹³⁾

表-2から、まず、抽出した言語活動について考察すると、「伝え合おう」「話し合おう」といったように、自分の考えを基にし、仲間とのやり取りを行う内容が記載されて

いたのが2社（ にて記す。）である。また、同じように、活動例をみると「伝え合おう」「話し合おう」といった内容が示されているのは、4社（ にて記す。）である。単に「伝える」「話す」だけの活動では一方通行の学習活動になる。しかし、自分と仲間との両方向のやり取りが必要である「〇〇合う」といった学習活動においては、伝えられる側も十分に自分の考えを形成していないと相互の学びには発展しない。また、新学習指導要領の文学的文章の言語活動例を分析してみても、いずれの学年においても、「伝え合う」というキーワードが見出される。このことから、単に「伝える」だけの言語活動で終わってしまうのではなく、「〇〇合う」という相互のやり取りの実現を目指すことが重要とされていることが伺え、新学習指導要領に即していることがわかる。（表-3）⁽¹⁴⁾

第1学年及び第2学年	第3学年及び第4学年	第5学年及び第6学年
イ 読み聞かせを聞いたり、物語などを讀んだりして、内容や感想などを伝え合ったり、演じたりする活動。	イ 詩や物語などを讀み、内容を説明したり、考えたことなどを伝え合ったりする活動。	イ 詩や物語、伝記などを讀み、内容を説明したり、自分の生き方などについて考えたことを伝え合ったりする活動。

次に、表-2から活動例を考察すると、物語の内容をきちんと捉える必要性として、登場人物を整理したり、物語の中で起きたできごとを確かめたり、それぞれの場面でのようなことがかかっているのかについて考えたり等といった学習展開の例が示されている。

さらに、この単元において児童に付けたい力についての記載についても抽出を行うと以下の表ようになる。

（表-4）

	内容
東京書籍	【中心となる人物とほかの人物との関わり】 中心となる人物の気持ちの変化は、ほかの人物の行動や気持ちと大きく関わっていることがあります。中心となる人物がほかの人物とどのように関わっているのかを考えながら、物語を読みましょう。次のことに気をつけましょう。 ○中心となる人物は、どのような人物か。 ○中心となる人物とほかの人物との間にどのような出来事があるか。 ○中心となる人物の気持ちが変わるきっかけとなる出来事は何か。また、その出来事にほかの人物はどのように関わっているのか。 ⁽¹⁵⁾

光村図書	たいせつ	【感じ方のちがいを知る】 ・物語を読むときは、登場人物のだれかと自分を重ね合わせたり、書いてあることを経験などと結び付けたりしている。そのため、物語の感じ方は十人十色である。 ・読んで感じたことや考えたことを伝え合うと、自分一人では気づけなかったことを教えられ、物語の読みが深まったり広がったりする。 ⁽¹⁶⁾
三省堂		【気持ちの変化を考えながら読む】 物語を読むときには、人物の行動や会話などから、場面ごとに気持ちを読み取り、どのような出来事がきっかけで、どのように気持ちがか変わったかを考えましょう。特に、きもちがか変わった出来事をくわしく読み取ることが大切です。 ⁽¹⁷⁾
学校図書	国語のカギ	【物語の最後の一文】 「ごんぎつね」の終わりの一文は「青いけむりが、まだつつ口から細く出ていました。」です。物語の最後になって、ごんや兵十からはなれて、「つつ口」や「青いけむり」という小さな部分に目を向けているのは、どうしてでしょう。 よくにた終わり方に「白いぼうし」の「車の中には、まだ、かすかに夏みかんのにおいが残っています。」があります。 今までに読んだ物語の終わりの一文に目を向けて、その終わり方からどんな感じを受けるか、考えましょう。 ⁽¹⁸⁾
教育出版	ここが大事	・情景を読む。景色や場面の様子(情景)が具体的に、ていねいにえがかれている部分「情景びょうしゃ」といいます。 ・情景びょうしゃと登場人物の気持ちに重ねることで、その気持ちがより具体的に表現されることもあります。 ⁽¹⁹⁾

これらの内容を考察すると、「登場人物の行動」「登場人物の性格や気持ちの変化」といったように「登場人物の～」というキーワードが示されており「登場人物」に焦点をあてることの重要性が示されている。また、中心となる人物とほかの人物との関わりや、感じ方の違いを知る等、児童に付けたい力が明確に記載されている。さらに、児童は学習を行う際、自分自身の身に付く力が明確なため、学習の到達目標がはっきりし、意欲的に取り組むことができるような工夫がみられる。そして、登場人物の関係性やクライマックス等といった、作品の内容を理解するための学習展開も記されている。上述した先行研究でも述べたように、教科書のてびきを考察すると、叙述に即した読みの学習展開方法が記されているだけに留まり、今回、課題だとしている、既存の知識や様々な体験と結び付けるための手立てや学習展開の提示はない。

3. 3. 既存の知識や様々な体験を結び付ける手立てとして南吉の背景にせまる。

既存の知識や様々な体験を結び付ける手立てとして南吉の背景にせまるについて、①新美南吉の生涯について、②南吉作品と教科書について、③南吉作品の教材価値についての観点から述べる。

3. 3. 1. 新美南吉の生涯について

新美南吉は、1913年(大正2年)、現在の半田市、愛知県知多郡半田町の出身である。本名は新見正八という。4歳で母を失い、8歳の時、母方の新美家の養子となる。養家では、血のつながらない祖母と二人きりで寂しい幼年期を過ごす。昭和6年、愛知県立半田中学校を卒業後、岡崎師範学校を受験したが体格検査で不合格となる。受験に失敗した南吉は、小学校の時の担任、伊藤仲治先生や竹内校長に相談し、二人の計らいで、半田第二尋常小学校の代用教員を勤める。17歳の南吉は、この時「ごん狐」を作り、子どもたちに実際に語って聞かせている。そして翌年、『赤い鳥』に掲載された。

その後、1932年(昭和7年)4月、東京外国語学校(現・東京外国語大学)英語部文科に入学する。南吉の幼年童話は50編ある。その内の約30編は東京外国語学校4年生の1935年(昭和10年)5月に書かれた。また、1938年(昭和13年)東京外国語学校を卒業し、富山の中学校に内定していたが、軍事教練の単位が取れず教員免許の取得ができず赴任しなかった。結核の再発によって4年半の東京生活を終え、南吉は1936年(昭和11年)1月に帰郷する。失恋・発病・失業という人生最悪の時期を経て、1938年(昭和13年)に県立安城高等女学校に就職する。美しい自然と素朴な人々に詩を見出しながら創作を続け、1943年(昭和18年)3月22日、喉頭結核のため29歳7ヶ月の短い生涯を閉じた。⁽²⁰⁾

3. 3. 2. 南吉作品の教材価値について

南吉の教材価値について、①南吉と日記について、②新美南吉とESDとの関わりについての観点から述べる。

3. 3. 2. 1. 南吉と日記について

南吉は体の調子が著しく悪い時や精神的ショックの大きい時等に一時的な中断も見られるが、小学3年生(大正11年)から、28歳(昭和17年)まで日記を書き続けている。

例えば、1933年(昭和8年)12月6日に書いた日記には、「便所の白いタイルの上に赤く咲いた血の花。喉の血か、鼻の血か、歯茎の血か。肺病だろうか。(中略)死ぬのは嫌だ。生きていたい。本が読みたい。創作がしたい。——やっぱり、同じように死にたくないと思いながらも、死に掴まれた文学する人が今まで沢山あったんだ。そうした人達のImageが一瞬自分の心をさむくした。」と記している。

他にも、1937年(昭和12年)2月5日の日記には、「自然のふところ。そこでは考えを整理する。」と書いている。

また、1937年(昭和12年)5月10日、河和小学校で代用教員をしていた時期の日記では、「名誉などいらぬ。このままこの海を見下ろす美しい小学校で教員をしていられたらとつくづく思うことがある。」と記している。

また、1940年(昭和15年)12月26日の日記には、「僕

はどんなに有名になり、どんなに金をはいる様になっても華族や都会のインテリや有閑マダムの出来る小説を書こうと思っはならない。いつでも足に草鞋をはき、腰ににぎりめしをぶらさげて乾いた埃道を歩かねばならない。」と記されている。

この南吉の日記（言葉）からは、文学観、人生観、子ども観、故郷への思い等がつまっていることが読み取れる。

特に、本研究では、1929年（昭和4年）3月2日の日記に記された「余の作品は、余の天性、性質と大きな理想を含んでいる。だから、これから多くの歴史が展開されて行って、今から何百何千年後でも、若し余の作品が、認められるなら、余は、其処に再び生きる事が出来る。此の点に於て、余は実に幸福と云える。」に着目する。⁽²¹⁾

3. 3. 2. 2. 南吉の日記とESDとの関わりについて

1929年（昭和4年）3月2日の日記とESDとの関わりについて述べる。国立教育政策研究所教育課程研究センターは、2012年のESDリーフレットにおいて「ESDの学習過程を構想し展開するために必要な枠組み」を提示した。その中で、ESDの視点に立った学習指導を進める上での留意事項として「具体的な課題の発見・探究・解決の過程で、児童生徒自らが持続可能な社会づくりに関する価値観を身につけ、自らの意思を決定し、行動を変革していくことができるように配慮することが大切です」⁽²²⁾と述べている。また、1987年のブルントラント委員会において、「持続可能な開発とは、将来の世代の欲求を満たしつつ、現在の世代の欲求も満足させるような開発」⁽²³⁾とされている。中澤・田淵（2014）は、このことから、世代内の公正と世代間の公正を具体的に示すと次の2点のようになるとしている。1点目は、世代内の公正とは、自己の現在の生活や行動が、途上国などに住む人々の生活に影響を与えることを意識、生活や行動を改善できることについてである。2点目は、世代間の公正には将来世代の人と過去の世代の人について意識することが含まれるとしている。⁽²³⁾

筆者は、この2点目について着目する。なぜなら、上述した1929年（昭和4年）3月2日の日記の内容からは、将来世代の人と過去の世代の人とを結び付けることができると考えられるからである。理由は、「これから多くの歴史が展開されて行って、今から何百何千年後でも、若し余の作品が、認められるなら、余は、其処に再び生きる事が出来る。」といった「言葉」が「日記」として残され、過去の時代に生きていた南吉が将来を見据えて、自分の作品に込めた願いや思いが生き残ってほしい、生き残っていたら幸せであると、切に願う気持ちが表現されているからである。

このことから、南吉の「ことば」を記した「日記」を取り扱うことは、南吉の文学観、人生観、子ども観、故郷への思い等といった南吉を取り巻く背景について読み取ることができ、将来世代の人と過去の世代の人の思いや願い

について意識することを実現させてくれる。そうすることで、南吉作品と合わせて日記を読むことは、ESDの理念を反映した国語科であると考えられる。（図-1）



（筆者作成）

図-1 日記と作品と将来世代の関わりについて

3. 4. 南吉作品と日記を用いて行った実践について、児童の実態及び変容を検討する。

南吉作品と日記を用いて行った実践について、児童の実態及び変容を検討するについてである。上述した、先行研究や教科書のとびきによる分析において取り扱いがなされていなかった、既存の知識と体験を結び付けるための手立てとして、日記を用いて南吉作品を取り扱った実践を、実践の概要、実践の実際、児童の変容の観点から述べる。

3. 4. 1. 実践の概要

(1) 実践実施年月日

2016年（平成28年）2月

(2) 単元名

「新美南吉の『ここが大好き！』コレクション」を未来へ繋ごう

(3) 領域：「読むこと」

(4) 対象学年：第6学年・27名

(5) 目標

- 南吉作品に込められた南吉の思いや願いについて観点を絞り、複数の本や文章などを選んで比べて読むことができる。（読むこと）
- 南吉作品を並行読書し、感じたことや考えたことを発表し合い、自分の考えを広げたり深めたりすることができる。（読むこと）
- 南吉作品を読み進める中で、登場人物の相互関係や心情、場面についての描写をとらえ、優れた叙述について自分の考えをまとめることができる。（読むこと）

まず、南吉について調べ、上述した1929年（昭和4年）3月2日の日記の存在との出会いから学習を始める。次に、学習のモデルとして、筆者が作成した「南吉の心のとびら」を提示し学習の見通しをもつ。「南吉の心のとびら」とは、

①「南吉が一番伝えたかったこと」、②「自分の大好きな叙述とその理由」、③「次世代（次に読む人）にメッセージ」といった3つの観点でカード作成し、それを凝縮ポートフォリオしたものである。そして、学級全体で、学習の進め方、まとめ方について学ぶ。さらに、並行読書から自分のお気に入りの南吉作品を選び、「南吉の心のとびら」にまとめる。最後に、それぞれの「南吉の心のとびら」を学級内で交流し、学級として南吉が作品にこめた一番の思いや願いは何なのかについて迫る。

3. 4. 2. 実践の実際

1929年（昭和4年）3月2日の日記の存在を知った児童は、「南吉作品には南吉の思いや願いが込められているのではないだろうか」といった視点で意欲的に作品を読み進めることができた。また、上述した3つの観点に絞って学習したことにより、一人一人の読みが確かなものになり、同じ作品を読んだり、読み終えた児童が仲間と南吉が作品にこめた思いや願いについて活発に話し合ったりする機会が増した。

以下に、児童がまとめた「南吉の心のとびら」からキーワードについて整理する。（表-5）

南吉の作品名	南吉が伝えたかったこと
てぶくろを買いに	<ul style="list-style-type: none"> ・家族の大切さ ・お母さんが子どもを思う気持ちは大きい ・人間はやさしいんだ ・母親の偉大さ ・人間は愛するという気持ちをもっている ・親子の愛
花のき村と盗人たち	<ul style="list-style-type: none"> ・美しい心を持つことの大切さ ・汚い心をもっているとどんどんだめになっていく ・人から信じてもらえる大切さ
うた時計	<ul style="list-style-type: none"> ・立派なやさしい大人に ・清廉潔白
ごんぎつね	<ul style="list-style-type: none"> ・優しい心を持ち続けよう ・自分の思いを伝えることの大切さ ・相手の気持ちを知ることの大切さ ・母親のいない自分のことを知って欲しかった ・相手の気持ちを理解しよう ・お互いに分かり合おう ・

牛をつないだつばきの木	<ul style="list-style-type: none"> ・協力することの大切さ ・戦争は2度と繰り返してはいけない ・みんなが幸せな気持ちになるようなことをすることが大切 ・やさしさは報われる
-------------	---

上記の児童の感想を学級全体でまとめると、以下の写真のようになった。（図-2）

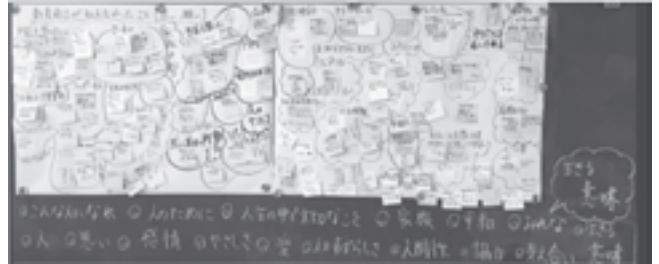


図-2 学級全体での話し合いの板書

学級全体でまとめると、上記の写真のようになった。児童が付箋に書いた内容から、南吉がそれぞれの作品に込めた思いや願いについて、多くみられるキーワードやキーワードを抽出すると、「こんな人になれ」「人のために」「人生の中で大切なこと」「家族」「平和」「みんな」「生きる」「人」「思い」「感情」「やさしさ」「愛」「人のすばらしさ」「協力」「支え合い」といった思いや願いをそれぞれの作品に込めていたのではないだろうかという結果になった。さらに、それらのキーワードから南吉が作品に込めた願いを一言でいうと何になるかを学級全体で考えると、「南吉は『生きる意味』を作品に込めた」という結論にいたった。

3. 4. 3. 児童の変容

本実践を通して、南吉の日記の存在を知らない状態での学習では、例えば、「ごんぎつね」を例にとってみると、児童は以下のような感想をもって学習を終えている。

（表-6）

ごんは兵十のためにいろいろしていたのに、最後打たれてしまうことになってかわいそうだ。
兵十につぐないをするごんのことを最後にわかってもらってよかった。
毎日兵十に粟をあげていることからごんはやさしいきつねに変わった。でも、最初のいたずらはいけなそう思う。
私はごんぎつねの優しいところが好きです。
最後の場面で「ごん」と呼んでもらえてうれしかったと思う

最後に兵十に打たれてしまったが、ごんはわかってもらえたので嬉しかったんじゃないかなと思った。

表－6の日記の存在を知らない児童の感想からは、ごんに対する兵十の気持ちや、兵十に対するごんの気持ち等、といったように、本文の内容に対する自分自身の感想をあげていることがわかる。しかし、上述したように、日記の存在を知ってから児童は、「南吉は『生きる意味』を作品に込めた」と結論付け、南吉がそれぞれの作品にこめた切なる思いや願いにせまることができた。

これは、読みの学習に加えて、南吉の背景に迫ったことによる効果であると考えられる。既知の知識や様々な体験を結び付けることに「日記」を活用することで、南吉作品との対話だけでなく、南吉作品と児童をつなげる役目を果たした日記との対話を共に行ったことが、児童の変容に効果的に働いた。

4. まとめ

2017年(平成29年)3月に告示された新学習指導要領では、「学習内容の改善・充実として、【知識及び技能】と【思考力、判断力、表現力等】の各指導事項について、育成を目指す資質・能力が明確になるように改善をした」と示された。その中で、特に、③学習過程の明確化、「考えの形成」の重視、について研究を行った。「考えの形成」については、中央教育審議会答申においても、「ただ活動するだけの学習にならないよう、活動を通してどのような資質、能力を育成するのかを示すため、(中略)全ての領域において、自分の考えを形成する学習過程を重視し「考えの形成」に関する指導事項を位置付けた。」とされていることを受け、1点目に、南吉の日記をとりあげたことの有能性について2点目に、「考えの形成」を行う際大切にしたいことについて記す。

1点目の南吉の日記をとりあげたことの有能性についてである。将来世代の人と過去の世代の人とを結び付けることができると考えられる、1929年(昭和4年)3月2日に書かれた日記では、「これから多くの歴史が展開されて行って、今から何百何千年後でも、若し余の作品が、認められるなら、余は、其処に再び生きる事が出来る。」と示され、過去の時代に生きていた南吉が将来を見据えて、自分の作品に込めた願いや思いが、生き残ってほしいと、切に願う気持ちが表現されていることがわかる。このことから、その日記を取り扱うことは、南吉の文学観、人生観、子ども観、故郷への思い等について読み取ることができ、さらに、将来世代の人と過去の人とを結び付けるという意味で、世代間の公正が実現する。これらのことを学習した上で南吉作品と合わせて日記を読むことで、ESDの理念を反映した国語科の実現につながったと考える。

2点目の「考えの形成」を行う際大切にしたいことについてである。教科書のでびきの考察からも読み取れるよう

に、単に「伝える」「話す」等といった、一方通行の学習活動だけでは「考えの形成」は実現しない。しかし、自分と仲間との両方向のやり取りが必要である「〇〇合う」といった学習活動においては、伝えられる側も十分に自分の考えを形成していないと相互の学びには発展しない。また、行動描写、会話描写、情景描写といった叙述に基づいて学習を展開することで、一人一人の児童が自分なりの読みをもつことが実現する。そして、それを相互に交流することを通して他者の読みと対話することによって、自分の読みを見直し、新たな読みを見出すことができる。

本実践では、南吉作品と児童をつなげる役目として、上述した1929年(昭和4年)3月2日の「日記」を活用した。日記の存在を知らずに学習を行った児童と、日記の存在を知ってから学習を行った児童を比べると、後者の方が児童の読みが深まり、より「考えの形成」の実現に結びついたのではないだろうか考える。このように「日記」を活用することで、既知の知識と様々な体験を結び付けることができ、その役目を果たすのではないだろうか。

以上のことから、文学的作品を取り扱い、「考えの形成」を行う際、その作品自体の魅力を読み味わい学習を展開することに加えて、既知の知識と様々な体験を結び付けるために、その作者の背景を知り、それを生かした学習を展開することで、より深い「考えの形成」につながる。

参考文献

- (1)文部科学省 小学校学習指導要領(平成29年告示)解説・国語編 東洋出版社
- (2)中央教育審議会答申(2016) 幼稚園、小学校、中学校、高等学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について
- (3)文部科学省 小学校学習指導要領(平成29年告示)解説・国語編 東洋出版社
- (4)白石範孝(2009)『読みの力を育てる用語』東洋出版社
白石範孝(2012)『白石範孝の国語授業の教科書』東洋出版社
白石範孝(2013)『白石範孝の国語授業の技術』東洋出版社
- (5)河野靖(2015)「物語教材における確かで豊かな「読み」を育む小学校国語科学習指導－『叙述を基にした解釈』と『自分の考えの形成及び交流』を手立てにした『ごんぎつね』の学習を通して－」大分大学教育福祉学部付属教育実践総合センター紀要、No33、2015
- (6)小山文明(1998)「他者との読みの比較の形態が読みの変容に及ぼす効果」、日本教育心理学総会発表論文集、40 p276
- (7)学校教育法第三十四条 http://www.kyoto-u.ac.jp/uni-int/kitei/reiki_honbun/w002RG00000944.html#joubun-toc-span
(2019年11月5日閲覧)

- (8)井上修治 近藤章 (2016) 豊岡短期大学論集 No.13.79-88 「新美南吉『ごんぎつねの研究』」
新美南吉記念館ホームページ
<http://www.nankichi.gr.jp/>
(2019年10月25日閲覧)
- (9)東京書籍(平成27年度版)『新しい国語 第4学年下』
p27-29
- (10)光村図書(平成27年度版)『国語4下 はばたき』
p26-27
- (11)三省堂(平成27年度版)『小学生の国語 4年下』
p138-139
- (12)学校図書(平成27年度版)『みんなと学ぶ 小学校国語4年下 p58-59
- (13)教育出版(平成27年度版)ひろがる言葉 小学校国語4年下 p48-49
- (14)文部科学省 小学校学習指導要領(平成29年告示) 解説・国語編 東洋出版社
- (15)東京書籍(平成27年度版)『新しい国語 第4学年下』
p29
- (16)光村図書(平成27年度版)『国語4下 はばたき』p27
- (17)三省堂(平成27年度版)『小学生の国語 4年下』
p139
- (18)学校図書(平成27年度版)『みんなと学ぶ小学校国語4年下 p59
- (19)教育出版(平成27年度版)ひろがる言葉小学校国語4年下 p49
- (20)井上修治 近藤章「新美南吉『ごんぎつねの研究』」(2016) 豊岡短期大学論集 No.13.79-88
新美南吉記念館ホームページ
<http://www.nankichi.gr.jp/>
(2019年11月12日閲覧)
- (21)新美南吉記念館ホームページ
<http://www.nankichi.gr.jp/>
(2019年11月12日閲覧)
- (22)国立教育政策研究所教育課程研究センター「ESDの学習指導過程を構想し展開するために必要な枠組み」
p.7
- (23)中澤静男 田淵五十生(2014)「ESDで育てたい価値観と能力」 <http://hdl.handle.net/10105/9849>
(2019年11月16日閲覧)